

平成 16(2004)年度

卒 業 論 文

表 題

横須賀城下町の歴史的変遷と地域構造

国士舘大学 文学部 史学地理学科 地理学専攻

4年 学籍番号 13-72631

氏名：清水 記久

指導教員：岡島 建 先生

提出日：平成 16(2004)年 12 月 9 日

要旨

本稿では、横須賀城下町の変遷過程と武家屋敷地域・町屋地域の地域制・機能から地域構造を解明することを目的として研究してきた。武家屋敷地域は身分制的配置をしていたが、幕末期になると身分制的配置が緩和し、屋敷の細分化、家臣の混住化が進み地域制が失われ、城主の意向が反映されなくなっていた。一番町～三番町では中級～下級家臣が上級家臣の住区に進出していき地域制が失われた。

町屋地域では、三社祭礼を城下町に取り込むなどして、領民を統治していった。また、城主とともに庄屋が町屋地域において大きな役割を果たしていた。そのため、庄屋のいなかった石津町は町政にあまり影響を与えていなかった。

城下町建設当初から城下町の経済を支えていた湊の機能衰退により、海上輸送が減少し、陸上輸送が大きなウエイトを占めるようになる。それに伴って、町屋地域の中心地は田町、新町から、本町周辺に移っていった。

1. はじめに

現在の都市の中で城下町に起源を持つものは数多くある。城下町は戦国時代には領国支配の拠点であり軍事的要素が強かった。その後、群雄割拠の時代が終わり江戸時代になると軍事的要素は薄れ、それぞれの藩の政治・経済の中心になっていく。また、城下町は関ヶ原合戦後の全国レベルでの大名移封によって建設ラッシュが起こり、全国各地に多くの城下町が誕生した。その後の城下町の配置は大多喜、館林、箕輪など関東地方に徳川系の譜代大名が配置され、豊臣系の大名は松江、高知、広島など西国に多く配置された。また、主要街道の東海道筋には尾張名古屋をはじめ譜代の大名が配置され特に、駿河・遠江には中小藩の城下町が多い。浜松、掛川、横須賀などがそうである。

浜松、掛川、横須賀など多くの都市がそうである。これらの都市の原点であるそれぞれの城下町についての研究は少なく、その実態は明かされていない。特に横須賀は主要街道の東海道からはずれており、また小規模な城下町であるためにあまり注目されていない。しかし、横須賀は江戸時代を通じて遠江国南東部の経済の中心であり、この実態を解明することは意義があると思う。

そこで本研究では遠江国の横須賀をとりあげ、その歴史的変遷を解明するとともに、武家屋敷地域と町屋地域がどのような地域制、機能を持っていたのかを考察する。これらのことから横須賀城下町の地域構造を呈示することが本研究の目的である。

史料については 1645～1682 年の「遠州横須賀惣絵図」、正徳 3 年(1713)の「遠州横須賀御城及御城下図」、幕末期(年不詳)の「横須賀城古図」の 3 枚の絵図と「横須賀惣庄屋覚帳」、「士分建家軒数取調帳」、「士族屋敷宅地割図」、「校正郷里雜記」である。これらの史料を使用し、横須賀城下町の建設過程、変遷過程、武家屋敷地域の配置、地域制、屋敷割の特徴、町屋地域の機能、祭礼との関係を考察していき、城下町全体の地域構造を明らかにしていきたい。

II. 従来の研究

城下町を巡る研究はさまざまな分野から行われ、多くの成果を残してきた。その中でも、矢守の呈示した城下町プランの変容系列に関する類型は、城下町研究の重要な成果である。城下町全体を類型化した戦国期型→総郭型→内町・外町型→郭内専士型→開放型という変容系列と、町人町の町割を縦町型→横町型、町人町の屋敷割を江戸型→京型という変容系列は、多くの城下町研究でとりあげられており、大きな影響を与え続けている。

中西¹⁾は藤堂高虎の建設した今治、伊賀上野城下町を事例として織豊期の城下町プランの近世的変容について研究を行った。その結果、今治城下町で「タテ町型」であった町割が、伊賀上野では「ヨコ町型」に転換し、織豊期城下町プランの「秀吉モデル」から次の段階に移行していることを示した。さらに、寺町を城下町の範囲を画定する手段として建設していること、流通経済重視という秀吉の考えを継承していることを解明した。

また、中西は織豊期の城下町における「タテ町型」から「ヨコ町型」への変化についても研究している。不安定な政治状況において領国内の絶対的首都として機能した城下町は「タテ町型」が多く、安定した権力のもとで一拠点として機能した城下町は「ヨコ町型」が主流になることを明らかにした。そこから関ヶ原合戦は全国的な安定した権力を構築しえず、全国レベルで都市プランの規範を変化させるには至らなかったとしている。

渡辺康代は宇都宮明神の付祭りと宇都宮町人町の変容の関係について研究した。そして、下町地域と宇都宮明神、城主との旧来よりの深い関係性を示し、また下町地域が上町地域よりも優位に立つという秩序が近世後期に至るまで保たれていたことを指摘した。さらに付祭りにおいて興行の要素が増すにつれ、町を単位とする結束が重要となり、上町・下町という地域の区別が薄れていったことを解明した。

関戸は矢守の呈示した変容系列を基に館林城下町、高崎城下町で

の城下町プランの変容について研究し、それぞれの城下町プランの特色を詳細に示した。館林城下町では歴史的変遷と地域構成から城下町プランの変容を研究し、館林城下町は城下町建設当初から総郭型のプランが維持され、幕末までこの古い型のプランが続いたことを明らかにしている。

本研究の対象地域である横須賀城下町では、矢守の呈示した城下町プランの変容系列に当てはまらないが、関戸が館林城下町の研究を参考にして横須賀城下町の地域構造を明らかにしようと思う。

Ⅲ. 対象地域の概要

横須賀城下町は現在の静岡県小笠郡大須賀町横須賀に当たる。掛川市の南約 10km に位置し、北は小笠山、南は遠州灘に囲まれ東西に細長い形をしている。近世中期までは城の手前まで海が深く入り込み、三方が入江と沼や深田に囲まれた天然の要害の地であった。

戦国時代に遠江国を領していた徳川家康は武田氏の前哨基地である高天神城を攻略するため大須賀康高に命じて山と海に囲まれた要害の地である横須賀に城を建設させた。築城は 1578 (天正 6) 年に始まり 1580 年 8 月にほぼ完成した。横須賀城は平山城として山城から平城に移る中間期の特徴を備え、中世城郭と近世城郭の二つをあわせもっている。初めは軍事的要塞であったが、高天神城落城後は掛川、袋井、浜松、相良へ通じる街道(図 1)による陸上輸送と横須賀湊から江戸への海上輸送など陸海交通の要所として明治維新まで遠州南部の拠点とされていた。表 1 を見ると、1580 年に初代城主大須賀康高が入部してから明治維新までに 20 人が城主になっている。また、1682 年からの 200 年間は西尾氏による支配が続いた。

具体的な考察に入る前に日本各地の城下町と横須賀城下町を比較し、横須賀城下町の特徴を捉えていこうと思う。資料として「横須賀城学術調査研究報告書」に載せられている江戸時代初期における諸城下町住区別面積(表 2)の表を用いる。

この表によると横須賀は中都市に位置づけられている。およそ松坂、掛川と同じ程度の都市である。横須賀城下町の総面積は 1.22km²で、その内訳は武家地 59%、町人地 16.4%、寺社地 11.5%、空地・その他 13.1%、内郭率は 10.7%である。武家地については平均的な値であるが、町人地は他の城下町に比べて低い値である。寺社地は中都市の中では非常に高い値である。寺社地は城下町北部の谷間に集中して建てられている。歴代城主による寺院招致策により領民の統一、城下町繁栄をねらったことから 2 万 5 千石～5 万 5 千

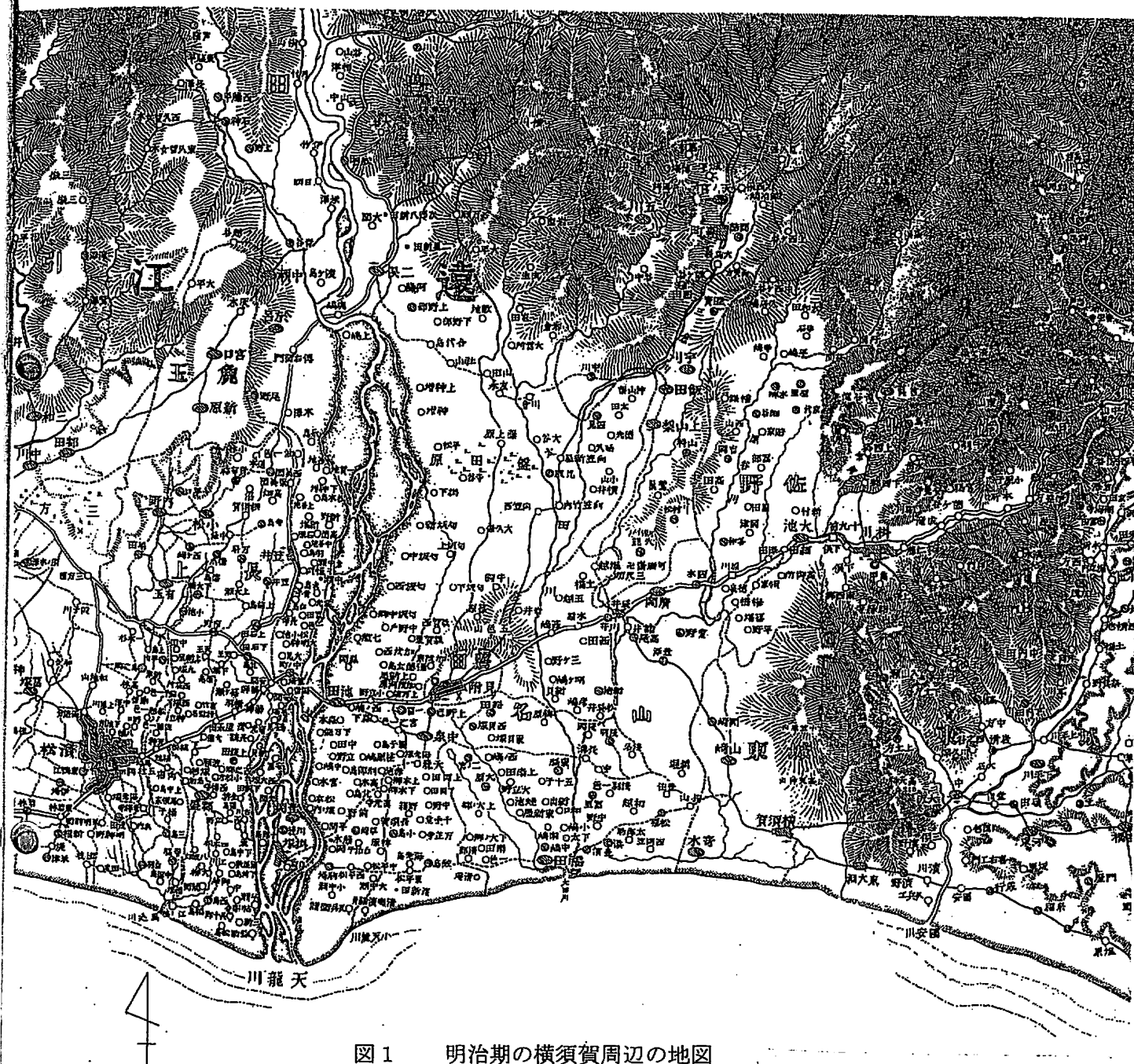


図1 明治期の横浜周辺地図

輯製二十万分一図復刻版より引用

0 10km

表1 歴代城主一覧表

代	城主名	期間	禄高
1代	大須賀五郎左衛門尉康高	1580～1588	3万石
2代	大須賀出羽守忠政	1588～1591	3万石
3代	渡瀬左衛門佐詮繁	1591～1596	3万石
4代	有馬玄藩頭豊氏	1595～1601	3万石
5代	松平出羽守忠政	1601～1607	5万5千石
6代	松平五郎左衛門忠次	1607～1615	5万5千石
7代	徳川(松平)常陸介頼宣	1615～1619	50万石
8代	松平大隅守重勝	1619～1620	2万6千石
9代	松平丹波守重忠	1620～1623	2万6千石
10代	井上主計頭正就	1623～1628	5万2千石
11代	井上河内守正利	1628～1645	4万5千石
12代	本多越前守利長	1645～1682	5万石
13代	西尾隠岐守忠成	1682～1713	2万5千石
14代	西尾隠岐守忠尚	1713～1760	3万5千石
15代	西尾主水正忠需	1760～1782	3万5千石
16代	西尾隠岐守忠移	1782～1801	3万5千石
17代	西尾隠岐守忠善	1801～1828	3万5千石
18代	西尾豊後守忠固	1829～1843	3万5千石
19代	西尾豊後守忠受	1843～1861	3万5千石
20代	西尾隠岐守忠篤	1861～1868	3万5千石

『大須賀町誌』、『校正郷里雜記』より作成

注 7代城主は駿府城主も兼ねていた、駿遠合わせて50万石

表2 江戸時代初期(1650頃)における諸城下町住区別面積

都 市 名	年 代	総 面 積 ¹⁾	公 家 地	武 家 地 (内 郭 含 む)	町 人 地	寺 社 地	空 そ の 地 他	内 郭 面 積 ³⁾	復 原 史 料	
大 都 市	江 戸	正保元年 (1644)	43.95 km ² (100.0%)	—	34.06 km ² (77.5%)	4.29 km ² (9.8%)	4.50 km ² (10.2%)	1.10 km ² (2.5%)	2.28 km ² (5.2%)	『正保年間江戸絵図』による。
	京 都 ²⁾	正保年間 (1647頃)	20.87 km ² (100.0%)	0.68 km ² (3.3%)	1.05 km ² (5.0%)	8.37 km ² (40.1%)	2.92 km ² (14.0%)	7.85 km ² (37.6%)	0.21 km ² (1.0%)	『寛永後万治前京都全図』(京都大学蔵「中井家史料」)による。
	大 阪	明暦 3年 (1657)	14.16 km ² (100.0%)	—	3.36 km ² (23.7%)	7.40 km ² (52.3%)	1.18 km ² (8.3%)	2.22 km ² (15.7%)	0.59 km ² (4.2%)	『新板大坂之図』による。
	仙 台	正保年間 (1647頃)	10.37 km ² (100.0%)	—	7.56 km ² (72.9%)	1.15 km ² (11.1%)	1.66 km ² (16.0%)	—	0.54 km ² (5.2%)	『陸前国仙台城絵図』(斎藤報恩会蔵)による。
	名 古 屋	万治年間 (1660頃)	9.20 km ² (100.0%)	—	5.69 km ² (61.8%)	2.18 km ² (23.7%)	1.14 km ² (12.4%)	0.19 km ² (2.1%)	0.78 km ² (8.5%)	『名古屋御城絵図』(名古屋城管理事務所蔵)による。
	金 沢	正保年間 (1647頃)	7.46 km ² (100.0%)	—	4.91 km ² (65.8%)	1.58 km ² (21.2%)	0.79 km ² (10.6%)	0.18 km ² (2.4%)	0.23 km ² (3.1%)	『加賀国金沢之絵図』(金沢市立図書館蔵)による。
	駿 府	元和 2年 (1616)	3.53 km ² (100.0%)	—	2.13 km ² (60.4%)	1.05 km ² (29.7%)	0.29 km ² (8.2%)	0.06 km ² (1.7%)	0.47 km ² (13.3%)	『駿河国駿府城絵図』(秋岡武次郎氏旧蔵)による。
中 都 市	姫 路	慶安 2~ 寛文 7年 (1649~67)	2.66 km ² (100.0%)	—	1.41 km ² (53.0%)	0.72 km ² (27.1%)	0.13 km ² (4.9%)	0.40 km ² (15.0%)	0.25 km ² (9.4%)	『姫路御城廻り屋鋪新絵図』(姫路市教育委員会蔵)による。
	津 山	正保年間 (1647頃)	1.88 km ² (100.0%)	—	1.24 km ² (66.0%)	0.45 km ² (23.9%)	0.13 km ² (6.9%)	0.06 km ² (3.2%)	0.09 km ² (4.8%)	『美作国津山城絵図』(内閣文庫蔵)による。
	横 須 賀	寛文年間 (1665頃)	1.22 km ² (100.0%)	—	0.72 km ² (59.0%)	0.20 km ² (16.4%)	0.14 km ² (11.5%)	0.16 km ² (13.1%)	0.13 km ² (10.7%)	『横須賀城下之図』(大須賀町撰要寺蔵)による。
	松 坂	正保年間 (1647頃)	1.01 km ² (100.0%)	—	0.42 km ² (41.6%)	0.53 km ² (52.5%)	0.06 km ² (5.9%)	—	0.08 km ² (7.9%)	『伊勢国松坂古城之図』(内閣文庫蔵)による。
	掛 川	正保年間 (1647頃)	1.00 km ² (100.0%)	—	0.60 km ² (60.0%)	0.32 km ² (32.0%)	0.02 km ² (2.0%)	0.06 km ² (6.0%)	0.06 km ² (6.0%)	『遠州掛川城 松平伊賀守』(内閣文庫蔵)による。
小 都 市	西 尾	正保年間 (1647頃)	0.62 km ² (100.0%)	—	0.47 km ² (75.8%)	0.14 km ² (22.6%)	0.01 km ² (1.6%)	—	0.03 km ² (4.8%)	『三河国西尾 伊井兵部少輔居城』(内閣文庫蔵)による。
	田 中	正保年間 (1647頃)	0.53 km ² (100.0%)	—	0.40 km ² (75.5%)	0.12 km ² (22.6%)	0.01 km ² (1.9%)	—	0.05 km ² (9.4%)	『田中城絵図』(藤枝市立西益津小学校蔵)による。
	日 出	正保年間 (1647頃)	0.29 km ² (100.0%)	—	0.16 km ² (55.2%)	0.11 km ² (37.9%)	0.02 km ² (6.9%)	—	0.02 km ² (6.9%)	『豊後国日出城絵図』(内閣文庫蔵)による。

注: 1)本データは、復原史料欄に示す各都市絵図より、(1600年頃)の図に準拠して算出された。

注: 1)本データは、復原史料欄に示す各都市絵図を1/10000現状図に復原計測したもの。()内は総面積に対する%。2)京都の都市域は御土居内とする。為に空地が多いことに注意。
3)内郭面積は、城主および親族専用地をい、一般に重臣邸のある三丸は含まない。ただし、江戸城、駿府城は別格で含んでいる。()内は内郭率=内郭面積/総面積

横須賀城学術調査研究報告書より引用

石という中小規模の城下町でありながら 20 有余の寺院が建てられたのである。空地は少し高めの値である。ただ、1665 年頃は城下町がまだ完成していない可能性もあり、そのため空地が高めの値であるのかもしれない。横須賀城はもともと軍事的な目的で建てられているため内郭率は高めの値である。以上のように住区別面積において横須賀城下町は町人地、寺社地、内郭率でそれぞれ特徴がみられたが、武家地には特徴がみられなかった。

IV. 横須賀城下町の歴史的変遷

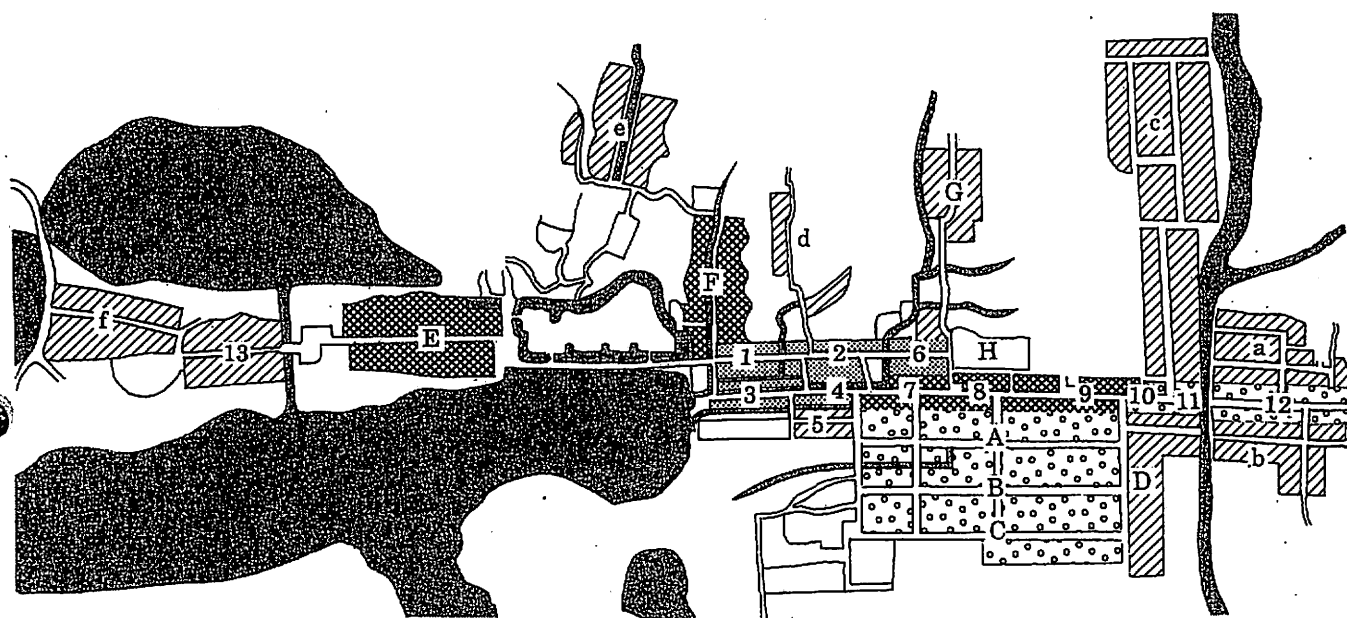
(1) 城下町の建設過程

城下町の建設は2代城主大須賀忠政の時から始められ、その建設過程は次の4つに分かれる。第1次建設期は1591年(天正19)に大須賀忠政が久留里へ転封するまで、第2次建設期は忠政が1601年に久留里から再び横須賀に入封し5代城主となつてから1607年まで、第3次建設期は1628年に11代城主井上正利が入封してから1645年に笠間へ転封するまで、第4次建設期は1645年に12代城主本多利長が入封してから1682に出羽国村山郡へ転封するまで、の4つである。このことをふまえて図2を見ながら城下町の建設過程を詳しく述べていく。

『校正郷里雜記』によれば、城下町建設以前の横須賀には三社市場という馬継ぎの宿場が置かれていた。この地は山裾を東西に延びる街道と谷筋をたどって東海道に出る街道が通り、古くからここに物資が集散し町場ができていた。本格的に城下町の建設が始められたのは2代城主大須賀忠政の時からで、三社市場の町場を核にして城下の町割を行ったという。

第1次建設期では三社市場の町場を整備し町屋を建てていき、西本町、中本町、東本町を建てた。町屋を普請する者には奥行き16軒、間口は望み次第の地所と竹木を与え、その上年貢免除、末代まで諸役免除などの優遇策が行われた。侍町は城に隣接する坂下の谷、石津に配置した。第1次建設期は町屋普請が始められた時期であり、西・中・東本町が完成していたかどうかは不明であるが、城下町建設当初はこれらの町が町屋地域の中心であった。

第2次建設期では本町から城までの間の町人町が完成した。新町は築城以来城の南にあった片側町を城の東に移転させたものであり、そのすぐ南側に田町を建てた。これらの町人町は第1期からすでに町屋普請が始められており、2代城主大須賀



町人町: 1 西新町 2 東新町 3 西田町 4 東田町 5 大工町 6 軍全町 7 西本町
 8 中本町 9 東本町 10 新屋町 11 十六軒田 12 川原町 13 石津町
 侍町: A 一番町 B 二番町 C 三番町 D 枕町 E 石津 F 坂下ノ谷 G 樹木ヶ谷 H 愛宕下
 足軽町: a 山畔 b 南町 c 大谷町 d 大倉之谷 e 小谷田 f 石津

建設時期

-  ~1591 年
-  1601~1607 年
-  1628~1645 年
-  1646~1682 年
-  水域

図2 町の配置と建設時期
 遠州横須賀惣絵図、[『]校正郷里雜記[』]より作成

忠政が久留里へ転封している間にも普請が進められていた。そして、忠政が横須賀に戻ってきた後に完成した。これらの町人町は第1次建設期に建てられた町と建設開始時期はほぼ同じと思われる。そのため第2期に建てられた町を普請した者にも優遇策がとられたと思われる。

第3次建設期には11代城主の井上正利が入封したが家中大勢のため家臣の屋敷が不足していた。そこで西大淵村の百姓屋敷や寺を移転させ、一、二、三番町を建てた。町屋地域では東本町より東側の新屋町、十六軒町、河原町が建てられた。この3町はいずれも1634年に建てられた町である。十六軒町は始め西大谷川の東にあり河原町と同町であったが、1644年に西大谷川の改修が行われた際に川の西側に移されて河原町と分けられた。

第4次建設期には愛宕下、樹木ヶ谷、枕町などの侍町と石津、大倉之谷、小谷田などの足軽町が建てられた。すべての足軽町は第4期に建てられており、城下町の外縁部に計画的に配置されている。町屋地域では石津町、大工町が建てられた。大工町は1643年に完成しており、明暦年間(1655～1658)になってから東田町の南に移されている。したがって惣町12町は第3期に完成していた。また、石津町は町民の町ではなかったので、第4次建設期には新しい町人町の建設は行われず、侍町、足軽町の建設が行われただけである。

このように城下町は4つの段階に分かれて建設され、町屋地域は50年程度で完成し、侍町、足軽町を含めても100年以内に完成している。

(2)城下町の変遷

次に城下町が完成した12代城主の時代から幕末までの横須賀城下町の変遷過程について述べていく。使用する史料は①「遠州横須賀惣絵図」(以後正保絵図とする)、②「横須賀御城

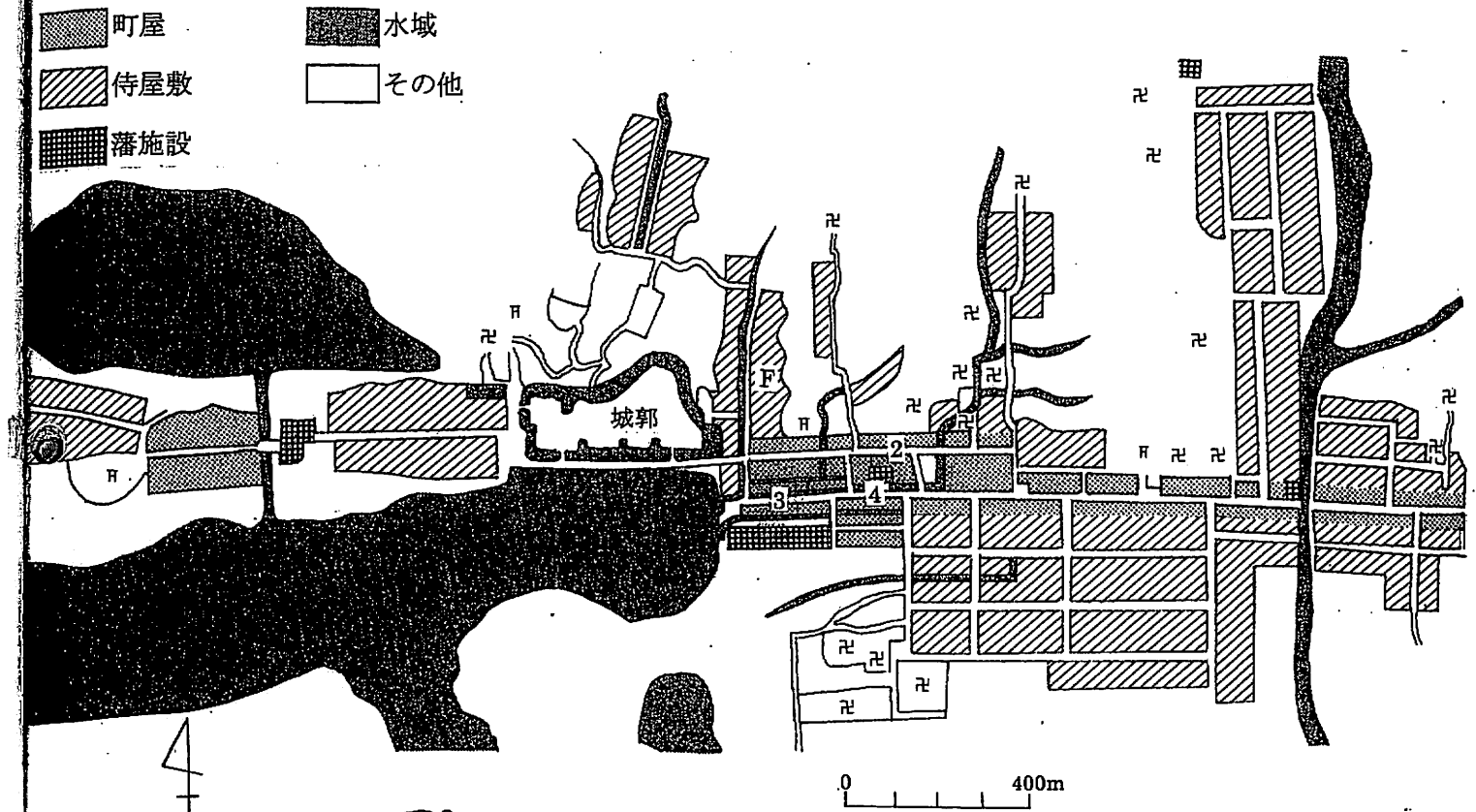
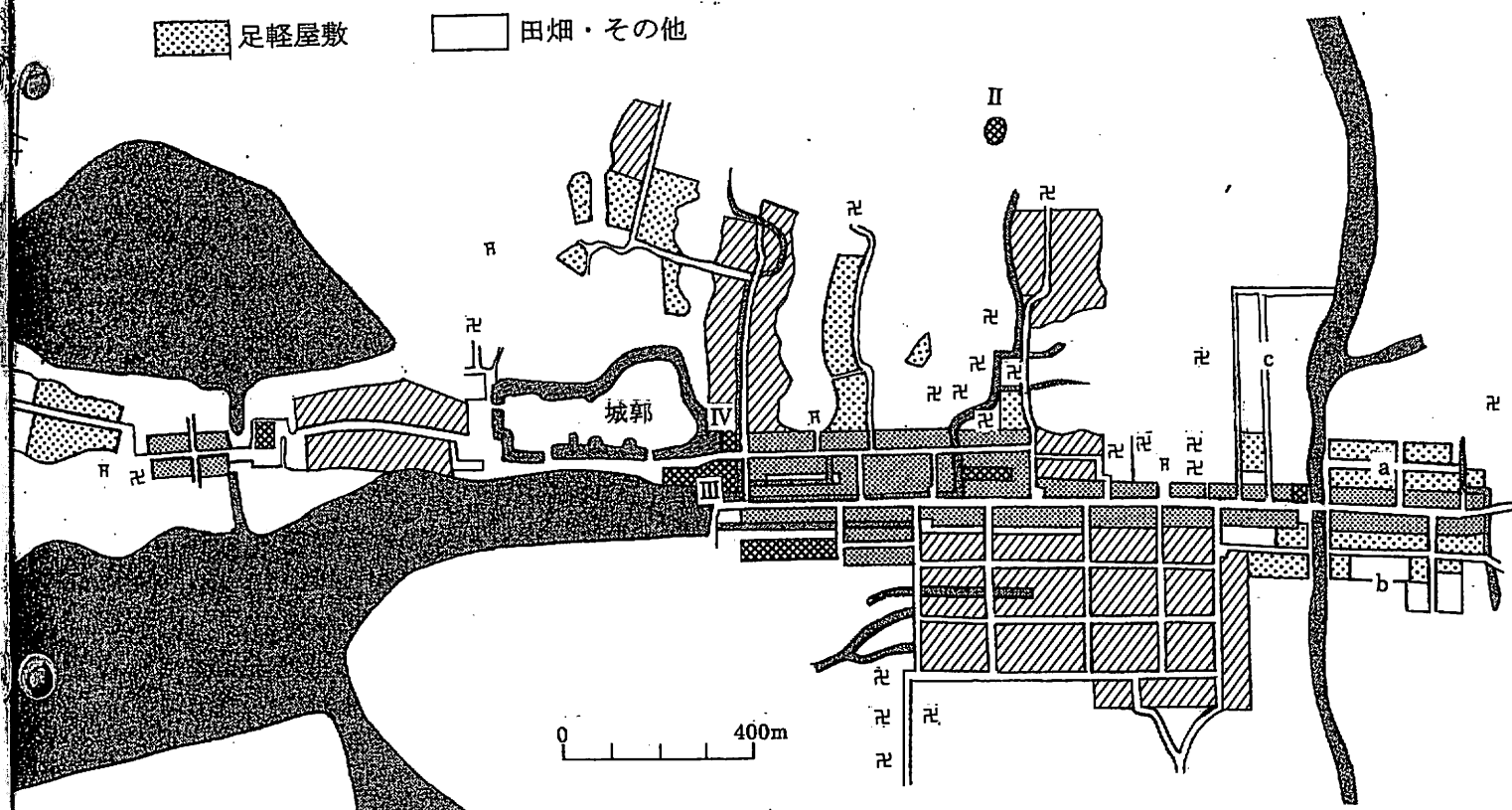


図3 正徳期～天和期（1645～1682）の横須賀城下町の地域構成
遠州横須賀惣絵図より作成

I 城郭 2 東新町 3 西田町 4 東田町 F 坂下ノ谷



Ⅱ 焔硝蔵 Ⅲ 御作事所 Ⅳ 会所 a 山畔 b 南町 c 西大谷

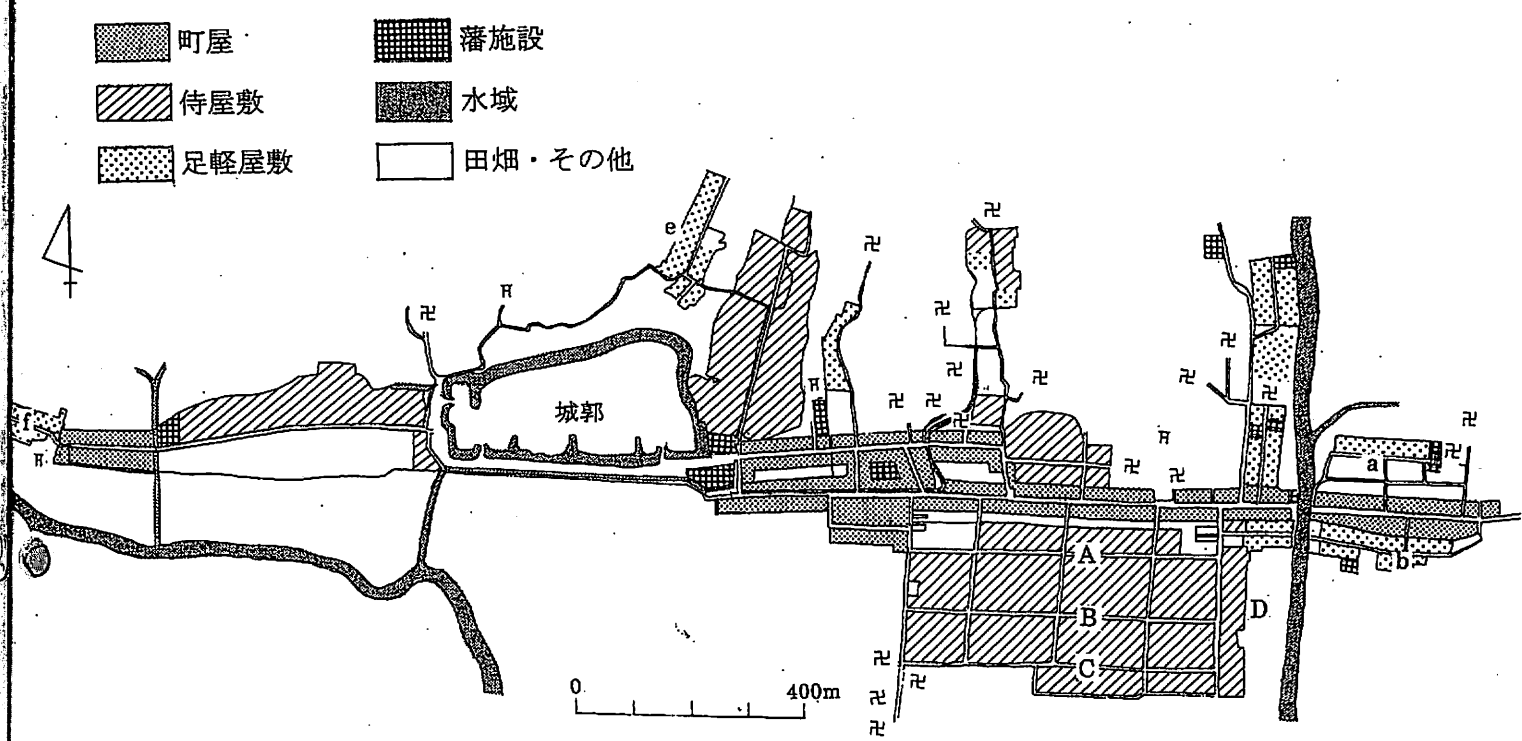


図5 幕末期の横須賀城下町の地域構成
横須賀城古図より作成

及御城下図」(以後正徳絵図とする)、③「横須賀城古図」(以後幕末絵図とする)の3枚である。図3は①、図4は②、図5は③を元に作成した城下町構成図で、これらの図から城下町の変遷を述べていく。

まず図3は正保期～天和期(1645～1682)の城下町の構成を表した図である。城郭から東側に向かって町屋地域が細長くのび、それを囲むように北と南に侍町が配置されている。(ただし遠州横須賀惣絵図では侍屋敷と足軽屋敷が区別されていないため、図2では侍屋敷に足軽屋敷も含んでいる。)寺社は谷間と三番町の南西に計画的に集中させて配置してある。また、町屋地域の西田町、東田町や武家屋敷地域の坂下ノ谷など各地に水路が掘られている。西、東田町付近は特に水路が多く見られるが、これは清水家、柴田家をはじめとする多くの回船問屋が軒を連ねていたためである。この時期は入り江が城郭のすぐ南、西田町のすぐ西側まできており、この入り江には横須賀湊があった。この湊を利用し横須賀城下町は年貢米や特産物などを江戸へ海上輸送する中継的な港町として繁栄していった(『大須賀町誌』)。そしてその中心地は水路沿いの西、東田町や東新町あたりであったと思われる。

次に正保期～天和期から正徳3年(1713)までの変遷について述べていく。大きな変化としては侍屋敷、足軽屋敷が大幅に減少している。特に減少が著しいのは西大谷の足軽屋敷である。正保絵図ではこの地域に空家も含めて147軒の屋敷が確認できるが、正徳絵図では4軒しか確認できない。南の部分の4軒が残っているだけで、それ以外はすべて畑に変わっている。また、西大谷以外でも山畔、南町で足軽屋敷が半減している。この侍屋敷、足軽屋敷の激減の原因として考えられるのは城主の禄高が減少したことである。正保～天和期の城主は12代の本多利長で、禄高は5万石であった。一方、正徳3年の城主は13代の西尾忠成か、もしくは14代の西尾忠尚である。正徳3年はちょう

ど 13 代から 14 代へ城主が変わる年であり、正徳絵図が正徳 3 年のいつ頃書かれたものなのか不明であるため、どちらの城主の時代のものかわからない。しかし、忠成・忠尚の両者とも禄高は 2 万 5 千石であるため、どちらの城主の時代に書かれたものでもここでは問題ない。5 万石から 2 万 5 千石へ禄高が半減したため家臣も正保期～天和期に比べて相当少なくなった。正保期～天和期では武家屋敷地域全体で明屋敷を抜いて 441 軒の屋敷があるが、正徳期では明屋敷かどうか不明なものを含めても 300 軒に満たない。このことから正徳期には城主の急激な禄高の減少に伴う家臣数の減少により武家屋敷地域は著しく縮小したと思われる。

先述したように横須賀城下町における横須賀湊の役割は非常に大きかった。しかし、この湊が宝永 4 年(1707)の大地震によって機能が衰退し、城下町の構造に大きな変化をもたらした。『庄屋覚帳』にこの地震による町屋地域の被害状況が記されている。表 3 は庄屋覚帳に記されていた地震の被害状況をまとめたものである。この表によるとつぶれた家屋 19 軒、半つぶれの家屋 45 軒、破損した家屋 475 軒となっている。河原町、新屋町、中本町、西本町、東田町、西田町、東新町、西新町、石津町はすべての家屋が被害を受けており、これらの町以外の 4 町でも半数以上の家屋に被害が出ている。つぶれ家屋、半つぶれ家屋、破損家屋を合わせると 539 軒であり、これは全体の約 9 割になる。このように 13 町すべてに大きな被害が出ている。

この地震による一番の被害は湊の機能が衰退したことである。図 3 と図 4 を見比べると入り江の面積が狭まっていることがわかる。地震により地盤が隆起したため入り江が縮小し、湊の出入り口も塞がったという(『大須賀町誌』)。こうして湊の機能が衰退し、年貢米や特産物などの物資輸送は海上輸送から陸上輸送、河川輸送へと変わっていった。物資輸送ルートの変化に伴い町屋地域の中心地も田町、東新町付近から本町付近に変わっていった(『大須賀町誌』)のである。このように湊機能の衰退は町屋地域の構造に大きな変化

表3 宝永4年(1707)の大地震による町屋地域の被害状況

	つぶれ	半つぶれ	破損	被害家屋数	大小家数
河原町	1	6	92	99	99
十六軒町	1	3	9	13	22
新屋町	0	1	37	38	38
東本町	5	0	24	29	32
中本町	3	7	30	40	40
西本町	0	4	37	41	41
東田町	1	0	50	51	51
西田町	0	3	53	56	56
大工町	1	6	15	22	49
軍全町	1	0	37	38	58
東新町	2	3	38	43	43
西新町	2	8	37	47	47
石津町	2	4	16	22	22
合計	19	45	475	539	598

『横須賀惣庄屋覚帳』より作成

をもたらした。

正徳絵図では水堀のすぐ東に会所、その向かいに御作事所、樹木ヶ谷の北に火薬を貯蔵するための焰硝蔵がはじめて描かれている。また、幕末絵図では坂下ノ谷、大倉之谷の間に遠見番所が描かれている。このように藩施設は城下町完成当初から備わっていたのではなく、徐々に設置されてきたのである。

最後に正徳期から幕末までの城下町の変遷を見ていく。図3から図4の期間と同様に、この期間も侍町、足軽町に変化が見られる。侍町では石津の南部分がすべて畑に変わっている。一番～三番町、枕町では地域の面積は変化していないが、屋敷数が増加している。正徳期では99軒であったが幕末期には118軒あり、19軒増加している。さらに、足軽町の五軒町、十軒町がこの地域に建てられている。また、二番町には中間小屋が武家屋敷に混じって建てられている。このようにこの地域では居住する家臣が増え、屋敷の細分化が進んでいったと思われる。足軽町では樹木ヶ谷の南半分、山畔の南半分が畑に変わり、小谷田の西側部分がなくなっている。樹木ヶ谷では武家屋敷と足軽屋敷が混在している。また、西大谷では畑であった地に仲町が建てられた。そのほか、小谷田、樹木ヶ谷、西大谷、山畔、南町、石津にそれぞれ矢場が設けられている。

ここまで城下絵図や史料から横須賀城下町の変遷を見てきた結果、さまざまな変化が明らかになった。横須賀城下町もほかの多くの城下町と同様に城下町完成当初には明確な地域制があったと思われるが、城主の禄高の変化などによって武家屋敷地域の拡大や縮小が起こり、幕末までに屋敷の細分化が進み、明確な地域制が失われていったと思われる。また、宝永4年(1707)の地震による湊機能の衰退で物資輸送方法が変更され、町屋地域の構造に大きな変化をもたらした。

V. 武家屋敷地域の構造

(1) 身分制的配置の特色

城下町において武家屋敷は身分制的な配置をしている。一般的に城郭内およびその周辺には身分の高い家臣の屋敷が置かれ、身分が低くなるにつれてその屋敷は城郭から離れた地域に置かれるという傾向がある。このように武家屋敷は身分に応じた配置をしていた。そこで横須賀城下町において武家屋敷がどのような配置をしていたのかを考察する。本研究では史料の関係で幕末期の配置の特色のみを考察していく。史料については、屋敷地の総坪数が記載されている幕末絵図、屋敷の建坪が記されている『士分建家軒数取調帳』の2つを用いる。この2つの史料を用いて各町の地域性をとらえ、武家屋敷地域全体の身分的配置の特色を考察していく。『士分建家軒数取調帳』には屋敷の門についても記されている。これによると横須賀城下町の侍屋敷は長屋門が備えてある屋敷、塀重門が備えてある屋敷、門が備わっていない屋敷の3つに分かれる。本研究では門が備えられている屋敷を身分の高い家臣の屋敷、門が備えられていない屋敷を身分が高くはない家臣の屋敷とする。表4は武家屋敷地域の建坪、表5は総坪数をまとめたものである。

① 石津（E、アルファベットは図2に対応）

総坪数をみると石津は他の侍町に比べて非常に値が大きい。平均は953坪もあり、中には1800坪以上の屋敷地を持つ家臣もいる。また、城郭に近い東半分がより総坪数が大きく、それに比べて西半分が少なくなっている。建坪では平均44.5坪であり、これも他の侍町に比べて高い値である。文久元年(1861)の記録では屋敷番号13の福田左次馬、2の小原藤右衛門は物頭、12の鳥居は御用人として記載されており、身分の高い家臣であったことがわかる。また、すべての屋敷に長屋門もしくは塀重門が備えられている。これらのことから石津は身分の高い家臣の町であったことがわかる。

② 坂下ノ谷（F）

総坪数の平均は432坪でありそれほど高い値ではない。しかし南

表4 幕末期における侍町の建坪

F 坂下ノ谷		E 石津		H 愛宕下		G 樹木ヶ谷		D 枕町		A 一番丁		C 三番丁	
番号	建坪	番号	建坪	番号	建坪	番号	建坪	番号	建坪	番号	建坪	番号	建坪
1	51	1	40	1	26	1	16	1	19	1	30	1	27
2	64	2	52	2	28	2	16	2	21	2	35	2	18
3	59	3	39	3	—	3	19	3	18	3	30	3	17
4	39	4	39	4	—	4	16	4	21	4	25	4	21
5	34	5	55	5	28	5	17	5	17	5	24	5	18
6	38	6	54	6	27	6	17	6	23	6	42	6	19
7	30	7	43	7	28	7	19	7	21	7	26	7	26
8	51	8	39			8	18	8	19	8	26	8	25
9	—	9	38			9	22	9	18	9	34	9	19
10	34	10	—					10	21	10	49	10	22
20	68	11	43					11	20	11	38	11	21
19	77	12	55					12	20	12	44	12	19
18	62	13	37					13	17	13	31	13	24
17	47							14	20	14	30	14	23
16	36							15	17	15	29	15	21
5	33							16	17	16	34	16	18
14	35							17	18	17	26	17	25
13	32							18	20	18	39	18	17
12	15							19	22	19	29	19	26
11	?							20	22	20	24	20	17
								21	28			21	19
								22	長屋			22	17
								23	23			23	19
								24	18			24	18
								25	21			25	20
												26	18
												27	21
												28	21
												29	17
												30	24
平均	44.7222	平均	44.5	平均	27.4	平均	17.7778	平均	20.0417	平均	32.25	平均	20.5667

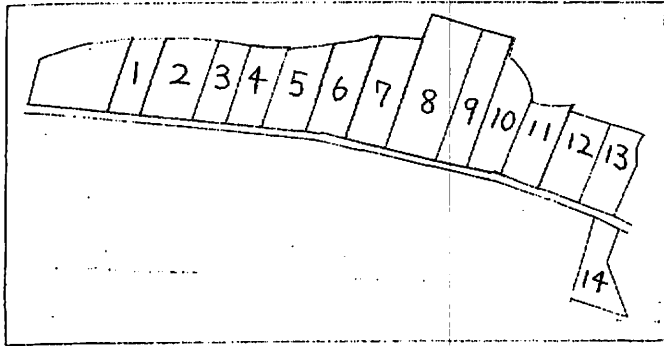
『士分建家軒数取調帳』より作成、番号は図6に対応する

表5 幕末期における侍町の総坪数

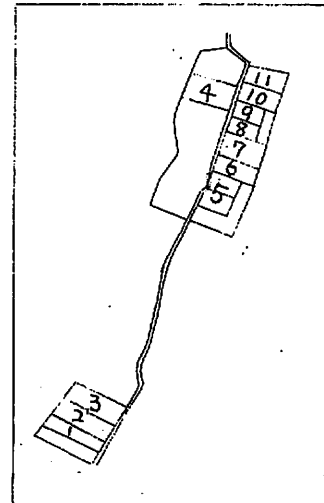
F 坂下ノ谷		E 石津		H 愛宕下		G 樹木ヶ谷		D 枕町			
番号	総坪数	番号	総坪数	番号	総坪数	番号	総坪数	番号	総坪数	番号	総坪数
1	515	1	500	1	502	1	171	1	290	21	407
2	483	2	1075	2	440	2	260	2	2??	22	—
3	468	3	760	3	440	3	247	3	2??	23	264
4	235	4	672	4	460	4	299	4	272	24	240
5	125	5	996	5	440	5	180	5	2?7	25	240
6	251	6	796	6	430	6	2?9	6	272		
7	261	7	1226	7	4?8	7	?	7	272		
8	262	8	1884			8	?	8	272		
9	—	9	1150			9	?	9	272		
10	518	10	855			10	299	10	288		
11	188	11	1005			11	298	11	299		
12	188	12	949					12	307		
13	340	13	1012					13	301		
14	231	14	458					14	286		
15	231							15	290		
16	257							16	257		
17	503							17	314		
18	900							18	313		
19	1027							19	255		
20	1225							20	266		
平均	432	平均	952.7143	平均	452	平均	250.5714	平均	284.6190476		

A 一番町		B 二番町				C 三番町			
番号	総坪数	番号	総坪数	番号	総坪数	番号	総坪数	番号	総坪数
1	550	1	280	21	744	1	117	21	288
2	670	2	576	22	350	2	356	22	312
3	570	3	500	23	356	3	320	23	364
4	615	4	670	24	356	4	185	24	300
5	651	5	578	25	372	5	403	25	423
6	870	6	608	26	663	6	325	26	409
7	581	7	608	27	598	7	325	27	409
8	708	8	600	28	611	8	?	28	409
9	682	9	432	29	597	9	?	29	409
10	635	10	432	30	673	10	350	30	409
11	542	11	7??	31	816	11	312	31	408
12	558	12	262	32	855	12	372	32	400
13	706	13	283	33	?	13	375	33	358
14	802	14	300	34	514	14	375	34	336
15	79?	15	252	35	366	15	324	35	319
16	682	16	544	36	360	16	350	36	320
17	794	17	365	37	345	17	?	37	285
18	792	18	355	38	677	18	364		
19	724	19	630			19	368		
20	374	20	—			20	377		
平均	658.2105	平均	500.8			平均	345.7647059		

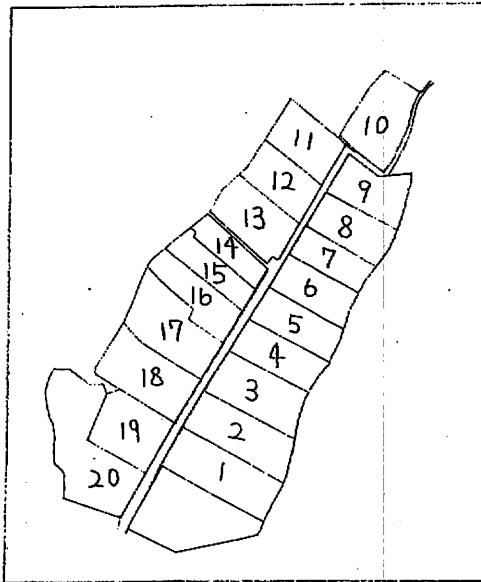
横須賀城古図より作成、番号は図6に対応する



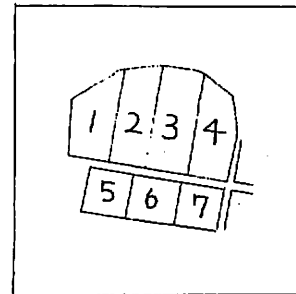
E 石津



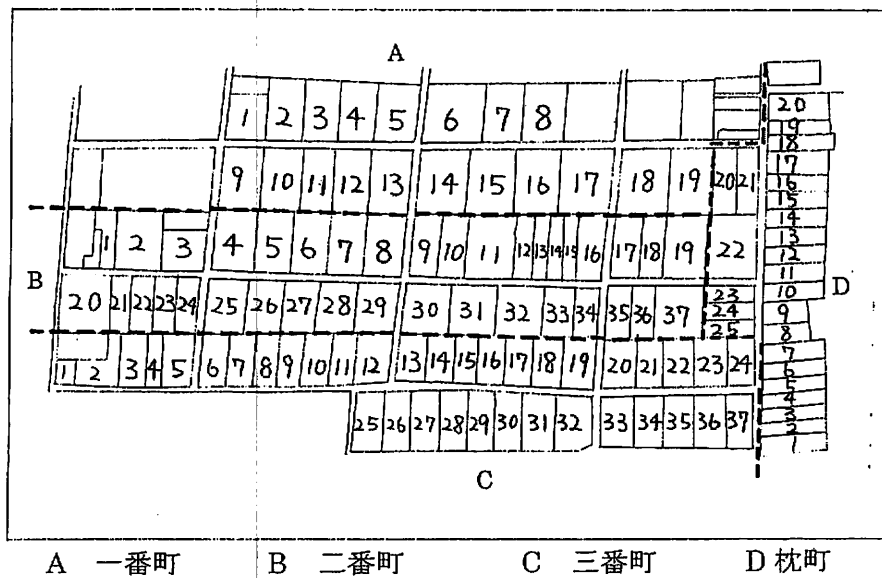
G 樹木ヶ谷



F 坂下ノ谷



H 愛宕下



A 一番町

B 二番町

C 三番町

D 枕町

図6 幕末期の武家屋敷地域の屋敷割
横須賀城古図より作成

半分と北半分に分けると南半分は平均 731 坪、北半分は 257 坪であり、大きな差が出る。南半分でも特に西側で大きな値となっており、1000 坪を超える屋敷もある。建坪では、これも総坪数と同様に南半分で高い値であり、北半分は南半分に比べて低い値である。また、坂下ノ谷ではほとんどの屋敷に門が備わっている。そして、南半分のほとんどが長屋門、北半分のほとんどが塀重門となっている。さらに屋敷番号 3 の青山源左衛門は年寄、4 の青山源之進は町奉行、20 の潮田覚右衛門は年寄、17 の富永又介は郡奉行の役職についており、また嘉永 4 年(1851)の御陣立ての際、大将、軍奉行の次に 1 の青山儀一郎が軍師として書かれている。このように南半分に高い役職の家臣の屋敷が集中している。北半分でも 8 の大黒八右衛門は代官、14 の並河半蔵は郡奉行に就いている。坂下ノ谷ではこのような身分の高い家臣だけが住んでいたわけではなく、11 や 12 など総坪数が 188 坪、建坪は 11 は不明であるが 12 は 15 坪であり、坂下ノ谷の他の家臣に比べて明らかに屋敷地が狭く、屋敷も小さい。このことから 11 と 12 はあまり身分の高い家臣の屋敷であるとは考えられない。

このように坂下ノ谷は年寄や町奉行などの身分の高い家臣が住んでおり、北半分より南半分の方がより身分が高い家臣が住んでいたことがわかった。しかし、身分が高い家臣が住む中で、北半分には身分が高くない家臣も住んでいた。

③ 愛宕下 (H)

愛宕下は総坪数の平均が 452 坪であり石津、坂下ノ谷に比べると低い値である。一番高いものが 502 坪で、一番低いものが 430 であり、あまりばらつきがなく統一的である。建坪は平均が 27 坪で、これも石津、坂下ノ谷に比べて低い値である。建坪も総坪数と同様にあまりばらつきがなく、総坪数、建坪の平均は武家屋敷地域全体の平均とほぼ同じである。

愛宕下はあまり特徴がなく、平均的な家臣が住んでいたと思われる。また、総坪数、建坪ともに統一的であり、同じ程度の身分の家

臣が住んでいたことがわかる。

④ 樹木ヶ谷 (G)

樹木ヶ谷は総坪数が 250 坪、建坪の平均が 17 坪であり侍町の中で一番低い値となっている。樹木ヶ谷も愛宕下と同様に総坪数と建坪はばらつきがなく、幕末絵図では侍屋敷と足輕屋敷の混在が見られる。これらのことから樹木ヶ谷は下級家臣の住む町であったことがわかる。

⑤ 枕町 (D)

枕町は総坪数の平均が 285 坪で、侍町の中で 2 番目に低い値である。建坪では平均 20 坪であり、これも 2 番目に低い値である。ただ屋敷番号 21 は総坪数 407 坪、建坪 28 坪で、さらに塀重門を備えてあり、枕町の中で際立って高い値となっている。また、枕町には士分長屋が 1 棟ある。幕末絵図では 6 名の名前が確認できる。21 を除いて枕町は下級家臣が住む町であったようである。

⑥ 一番町 (A)

一番町は総坪数の平均が 645 坪で、石津について 2 番目に高い値である。建坪の平均は 32 坪で、こちらも高い値である。また、一番町の屋敷はすべてに門が備えてある。屋敷番号 16 の行倉孝三郎は平士役人、19 の堀は代官の役職である。これらのことから一番町は上級家臣が住んでいたと思われる。

⑦ 二番町 (B)

二番町については、建坪の史料が欠けているため総坪数のみで考察を行なっていく。総坪数の平均は 480 坪で、一番町に比べると低い値である。総坪数が 850 坪以上の屋敷地がある一方で 250 坪程度のところもある。また、幕末絵図では西端には中間小屋が 1 棟確認できる。このように二番町では家臣の混住が見られる。屋敷番号 38 の青山五郎と 5 の阿部百麻は目付、29 の依田半左衛門は名代、31 の長沼と 33 の浅田は平士役人の役職に就いており、これらの上級家臣が住んでいた。

⑧ 三番町 (C)

三番町は総坪数の平均が 346 坪、建坪の平均が 21 坪であり、両方とも低い値である。また、37 軒中で門が備えられている屋敷が 6 軒しかない。ただ、門が備え付けられているといっても、総坪数が 300～400 坪程度、建坪が 20～25 坪程度であり、上級家臣とはいえない。このように三番町は中級～下級の家臣が住んでいたようである。

以上 8 つの侍町について総坪数、建坪などからその特徴について見てきた結果、横須賀の身分制的配置の特徴が明らかになった。石津の東側、坂下ノ谷の南側など城郭に隣接する地域に奉行などの最上級家臣を住まわせ、上級家臣は石津、坂下ノ谷、一番町、二番町に住ませた。上級家臣以外を愛宕下、枕町、三番町に住まわせ、下級家臣は樹木ヶ谷、枕町に住ませていた。このように横須賀城下町では町によって身分の上下を区別して住ませていた。ただ、それぞれの町の中でも身分に差が出ているところもあり、身分の高い家臣と身分の低い家臣の混住があったと思われる。

(2) 一番町～三番町、枕町の屋敷割

横須賀城下町の武家屋敷地域の屋敷割についての史料は明治初期に書かれた士族屋敷宅地割図のみである。これは明治初期の一番町～三番町、枕町の士族屋敷の表間口が描かれており、明治初期の屋敷割が明確にわかる。これを見ると幕末期の屋敷を 2 等分したものが多く、また幕末期の屋敷割がそのまま残っているところも見られる。このことを手がかりとして幕末絵図と士族屋敷宅地割図をもとに幕末期の一番町～三番町、枕町の屋敷割図(図 7)を作成した。

この地域の表間口規模はかなりばらつきがある。この地域で最大規模である 24 間以上の屋敷は一番町と二番町の北街区にちらばっている。またこれらの屋敷はすべて角に配置されているのが特徴である。特に二番町では 24 間以上の屋敷から 7 間 6 尺 4 寸以下の屋敷までが混在していることがわかる。まず一番町から詳しく考察していく。

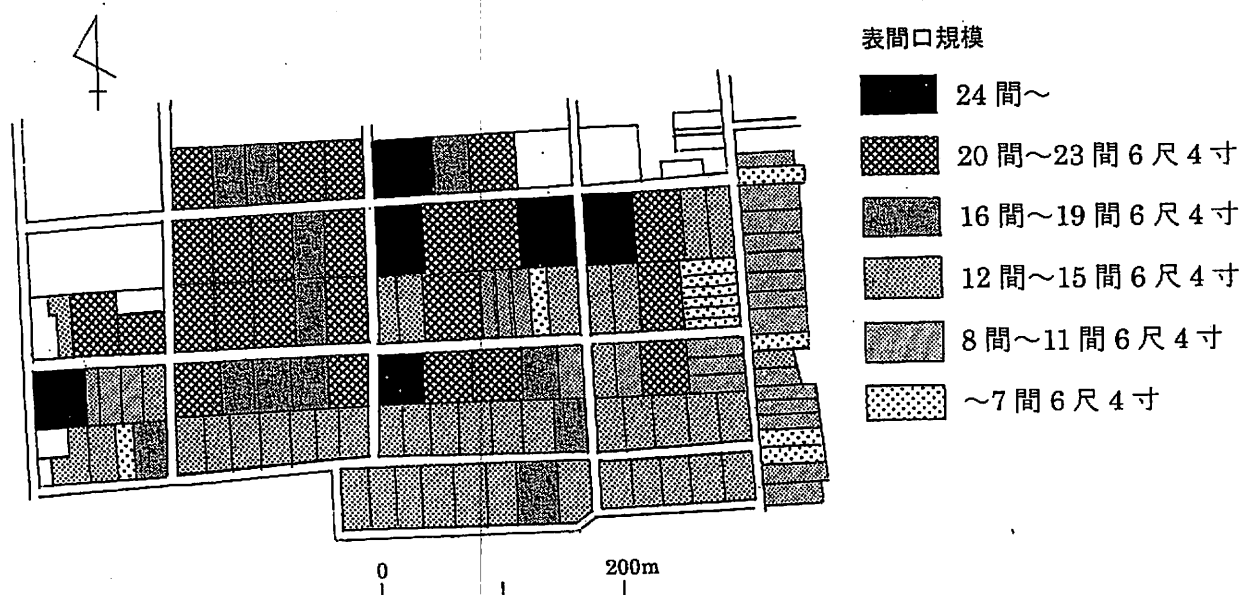


図7 幕末期における一番町～三番町、枕町の屋敷割
士族屋敷宅地割図、横須賀城古図より作成

一番町で最大の表間口は屋敷番号 6(屋敷番号は図 6 に対応している)の 29 間 1 尺 5 寸である。最小は 20 の 12 間である。29 間 1 尺 5 寸から 12 間までかなり差がある。一番町では 24 間以上の屋敷が 4 軒 20 間以上の屋敷が 11 軒、それ以下は 5 軒であり、20 間～24 間の屋敷が多く見られる。西側の街区は 16 間台の屋敷が 1 軒あるが、その他は 19 間～22 間の屋敷が並んでおり表間口規模に統一性が見られる。中央の街区の南部分は 23 間台の屋敷が 2 軒と 25 間の屋敷が 2 軒であり、ここも表間口規模に統一性が見られる。東側の街区は 12 間～24 間の屋敷が並び、表間口規模に統一性がない。この街区は元々 22 間～24 間程度の屋敷が 3 つ並んでいたものから屋敷割の細分化が進み、このように統一性に向けた屋敷割となっていた。中央の街区では正徳期～幕末までの間に年貢地が配置され、そのため南部分では表間口が不連続な部分が生じたと思われる。それ以外の街区では正保期～正徳期までの屋敷割が残されている。

一番町では表間口が 20 間台前半の屋敷が並んでいたものが、年貢地を配置したことや屋敷地の分割があったことで幕末期には不連続な部分が出てきて、統一性のない屋敷割になったのである。

二番町では特に表間口規模の不連続な部分が多い。西側の街区は 23 間の屋敷が 2 軒と 13 間の屋敷が 1 軒、それと中間小屋が 1 棟となっている。この地域は正保絵図、正徳絵図ではおよそ 70 間を 3 等分した屋敷割となっている。幕末期になると西端の 1 軒を中間小屋と 13 間の屋敷に分割し、このような屋敷割になったのである。その南側でもおよそ 3 等分されていた屋敷地が分割された結果であると思われる。中央の西側の街区の北側ではほぼ 20 間程度の屋敷が並び、表間口規模に統一性が見られる。南側の街区でも 20 間程度の屋敷が並び統一性が見られる。中央の東街区では北側でかなり不連続な表間口規模となっている。この街区には 7 間台～23 間台の屋敷が混在している。屋敷番号 12～15 は 7 間台～8 間台で表間口が統一されている。これは幕末期には上級～下級家臣の混住が進み、元々上級家臣の屋敷地だったところに中級～下級家臣が移り住んだ

ため屋敷地が分割されたものである。南側の街区では 11 間台～28 間の屋敷が並んでいる。ここでは屋敷地の分割があまり行なわれていない。東街区では表間口規模に不連続な部分が見られる。この街区は 20 間程度の屋敷が 3 軒並んでいたものが、上級～下級家臣の混住化により屋敷地が分割されていった。北側の街区では西の屋敷地が 12 間ずつに 2 等分され、東の屋敷地には士分長屋が置かれた。南街区では西の屋敷地が 12 間ずつに 2 等分され、東の屋敷地はおおよそ 10 間ずつに 3 等分されたものである。二番町では家臣の混住により屋敷地が細分化された部分が多いことがわかる。

三番町はほとんどの地域で表間口規模が統一されている。ただ西の街区では表間口が 15 間程度の屋敷と 7 間程度の屋敷があり、屋敷割が複雑である。この街区ではおおよそ 70 間の街区を 3 等分していたものが、身分制的な配置の緩和により上級～下級家臣の混住化が進んだ結果、屋敷割が複雑化、細分化したものである。中央の西街区では 13 間～15 間の屋敷が並んでおり、表間口規模が統一的である。また、中央の東街区でもおおよそ 13 間～16 間であり、これも統一的な屋敷割である。中央街区は正保期から一貫して 100 間の街区を 7 等分した屋敷割が維持されており、屋敷割に変化がなかった。この街区と尻合わせになっている二番町の南街区と比べると表間口規模に大きな差がある。二番町の南街区はおおよそ 18～24 間程度の屋敷が並んでいるのに対し、三番町の中央街区ではおおよそ 13 間～15 間の屋敷が並んでいる。二番町と三番町では表間口規模に明確な差があったことがわかる。三番町のほかの街区でも 12 間～15 間の屋敷が並んでおり、屋敷割が統一的である。

三番町では正保期の屋敷割が維持されている部分が多く、屋敷割が統一的である。ただ、西街区のみ屋敷割の複雑化、細分化が進んでいった。また、三番町と二番町では表間口規模に明確な差が出ていることから、三番町と二番町の間で身分的にも差があることがわかる。

枕町は下級家臣の町であり、表間口は 6 間～12 間という小さい規

模である。ほとんどの屋敷は7間～10間程度であり、表間口規模は統一的である。また、枕町の範囲は正保～正徳期までは道の東側のみであったが、幕末期には道の西側の屋敷が枕町に編入している。下級家臣の町に編入したため西側の屋敷地は細分化されている。

以上のように一番町～三番町、枕町の屋敷割について考察を行なった結果、この地域では城下町完成当初の正保期の屋敷割を維持してきた地域と、屋敷割が複雑化、細分化していった地域があることがわかった。特に屋敷割が複雑化、細分化していったのは二番町、三番町の西の部分と、二番町の東半分である。これらの地域では表間口規模に大きな差が出ていることから、身分制的な配置の緩和による上級～下級家臣の混住が進んだ結果、屋敷割が複雑化、細分化していったと思われる。また、一番町、三番町では正保期の屋敷割が維持されている地域が多く、特に三番町では統一的な表間口規模であり、家臣の混住化が起きていないようである。言い換えると下級～中級家臣が上級家臣の屋敷地である一番町、二番町に移り住んでいったということである。表間口規模を見る限りでは、一番町と二番町にはあまり差がないが、二番町と三番町の間では大きな差があり、ここに明確な身分制的な配置が見られる。

VI. 町屋地域の構造

1) 石津町の役割

横須賀城下町の町屋地域は 13 の町によって成り立っている。その配置は図 3 を見ると城の南の中土井から東に延びる東西の街道に西から西新町、東新町、軍全町、その南の街道に西田町、東田町、西本町、中本町、東本町、新屋町、十六軒町、河原町が配置されている。これらの 12 町は総称して横須賀惣町と呼ばれていた。そして城から西に延びる街道に石津町が配置されている。このように町人町は城の東の街道に集中させて配置されているが、石津町のみ城の西に配置されている。なぜ石津町のみが城の西側に配置され、他の町人町と離れた場所にあるのか、また、どのような役割を持っていたのか。その疑問を『横須賀惣庄屋覚帳(以後は庄屋覚帳)』等を使用して解決していこうと思う。

石津町の成立年については詳しいことはわかっていないが、12 代城主の時(1645～1682)に完成している。ただ、石津町は町民の町ではなく村であったが、町並みに家が並んでいたのも石津町といわれ、城下町の一部として扱われた(『大須賀町誌』)。元禄 5 年(1692)の家数・人数改の記録では石津町のうち 14 軒が百姓屋敷であり、それ以外は町屋敷であった。このことから元禄期には町人と村人が混住していたようである。だが、城下絵図では町人町として描かれており、町人町として認識されていたのである。

次に『庄屋覚帳』から石津町について考察していく。天保 8 年(1837)の記録では、この年は米穀が高値になり、困窮の者が出てきた。「町々在々極困窮之者一(中略)一石津町を除十二町之内成る可の家々貳百文以上段々志集一(中略)一町々右之志を請候家数ノ貳百五拾壱軒一(後略)。」(『庄屋覚帳』出典)というように石津町を除いて惣町で金銭を集め、困窮の者に分け与えたのである。この時は惣町の中だけで金銭の収集と分け与えを行っている。ここで石津町が除かれたのは、石津町では困窮の者が出なかったのか、それとも惣町と何らかの区別をされていたのか、どちらかの理由である。『庄屋覚

帳』の次の記事を見ると、御用達衆から困窮の者に米が与えられたようである。この米は惣町とともに石津町にも与えられており、石津町でも困窮の者が出ていたようである。そうすると、金銭の収集と分け与えで石津町が除かれたのは、石津町は町人町として扱われていたが惣町とは区別されていたためであると考えられる。このことは石津町のみ三熊野神社大祭(以後三社祭礼とする)に参加していないことからわかる。三社祭礼は町民の最大の娯楽であり(『三熊野神社の地固め舞と田遊び』)、これに参加していないということは石津町が完全な町人町とは認識されていなかったといえる(三社祭礼については後述する)。

次に町政の運営における石津町の役割についてみていく。

町屋地域では災害時や城の堀の普請の時などに御用人足が課された。この御用人足について 1 つ例を挙げて説明していく。天保 11 年(1840)11 月に町屋地域で大火があった。西本町、中本町、東本町が焼失し、中本町は全焼するという被害が出た。この際、被害にあった西本町、中本町、東本町を除いた惣町と石津町に御用人足が課された。人足の数は、1868 年の人口と照らし合わせると惣町では人口のおよそ 3~4 割、石津町では 1 割強であった。人足数の大小はあるが、御用人足において石津町は惣町と区別なく同様の役を課されていたのである。

町屋地域の運営において石津町と惣町の大きな違いは庄屋の存在である。庄屋は横須賀城下町の町政の運営において重要な役割を果たしている。神社や堀の普請、祭礼の取り決め等の城主からの命令は庄屋が町奉行所に集められ、そのあと庄屋達の相談の上町人に知らされ、先述した御用人足なども庄屋達が相談し人足の振り分けをしていた。また、町から城主や役人への請願などは庄屋を通して伝えられていた。このように庄屋は城主・役人と町人の間に入り、町政の運営に大きな影響を与えていた。また、庄屋は毎月交替で総代役(月番庄屋)を務めていた。

庄屋は惣町で各 1 名ずついて、河原町のみ 2 名いた。河原町だけ

庄屋が2名いたのは、この町が最も人数が多かったためである(『日本歴史地名大系』)。石津町は庄屋がいなかったようである。『庄屋覚帳』の記録で庄屋連判の際に石津町のみ庄屋の名が出ていないことや、庄屋覚帳で一度も石津町の庄屋の名からが出ていないことから、石津町には庄屋がいなかったことがわかる。町政の運営を担っていた庄屋がいなかったことから、石津町の町政での役割は小さく、町屋地域の運営にはあまり影響を及ぼさなかったのである。

石津町は城の西に配置されたのではなく、そこに村の町並みがあったため町とされ、城下町に編入されたのである。また、元禄初期には町人と農民の混住があったが、町人町として認識されていたのである。石津町以外を総称して惣町と呼ばれていることや、三熊野神社大祭に参加していないこと、天保8年(1837)の米穀高値の時の記録などから惣町とは区別をされており、完全な町人町とは認識されていなかった。しかし、御用人足は惣町と同様に課せられており、町政での役割もあったようである。ただ、町政で重要な役割を担っていた庄屋がいなかったことから、その役割は小さく町政の運営にはあまり影響を及ぼしてはいない。

2)町屋地域の構造

まずはじめに町屋地域の人数、職業構成を見ていく。表6は惣町と石津町の人数・家数を『庄屋覚帳』からまとめたものである。この表を見ると享保7年(1722)～明治2年(1869)の間では人数はおおよそ2500人で、家数はおおよそ670～680である。この13町のなかで河原町の人数・家数が非常に多いことがわかる。町屋地域の人数・家数は多少の人数の減少があるが、ほとんど変化がない。

表7は『町内屋号調査』をもとに職業構成をまとめたものである。非常に不完全な表ではあるが、この表からさまざまな職業があったことがわかる。なかでも、酒造が5軒、商人宿・旅人宿が合わせて5軒で比較的多いといえる。また、『庄屋覚帳』の宝永7年(1856)の記録では酒造人が24人いたことがわかり、そのほか安政3年

表6 町屋地域の人数・家数

町名	1722年 (享保7年9)	1869年(慶応4)		1869(明治2)	
	人数	人数	家数	人数	家数
河原町	424	362	93	358	95
十六軒町	111	112	29	118	30
新屋町	171	178	47	187	49
東本町	143	152	40	148	43
中本町	167	184	49	177	49
西本町	200	165	45	170	45
軍全町	240	206	62	211	66
東新町	227	230	62	235	64
西新町	217	200	52	202	58
東田町	192	190	53	193	54
西田町	179	270	67	268	69
大工町	228	167	49	158	52
石津町	145	109	26	—	—
合計	2644	2525	678	2425	674

『横須賀惣庄屋覚帳』より作成

表7 幕末期の職業構成(判明しているもののみ)

業種	軒数	業種	軒数
酒造	5	八百屋	1
呉服	2	旅人宿	2
煙草	1	漁網	1
染物	2	貸金	1
饅頭	1	豆腐	1
商人宿	3	漆塗り	1
畳	1	薬	1
小間物	1	糒	1

『町内屋号調査集』より作成

(1710)には郷宿が 47 軒、明治初年には砂糖、酢、醤油、足袋などの職業があったようである(『日本歴史地名大系』)。酒造屋は宝永期の記録から庄屋になっているものが多く、有力な商人である場合が多いようである。

弘化 4 年(1847)の記録では魚類の小売りをしている家が 59 軒あったことがわかる。これは町屋地域の約 1 割にあたり、横須賀城下町では魚商売が活発に行われていたようである。同年の記録(1847)に「町々肴商売之者浜表江罷越、取揚高之内荷物一割当処寄場江成差出、其余を私共買取御家中様並に町方小売行届候様仕残り魚者他所送りにいたし候節者、渡世方利潤之第一に相成候」(『庄屋覚帳』出典)とある。このことから近海で獲れた魚を城下町の肴寄り場へ送るほか、他領へも魚を送っていたことがわかる。また、この当時の肴寄り場は中本町、東本町にあり、そこに獲れた魚が多く集まっていたようである。

宝永 4 年(1707)の大地震によって横須賀の入り江が消滅したことは図 4 と図 5 を見比べれば明らかであり、漁業に大きな被害が出ていると思われたが、この記録から横須賀湊が機能しなくなっても魚商売は活発に行われていたことがわかる。ただ浜から東本町・中本町の寄り場へ魚を送る際は陸上で輸送しており、城下町完成当初から横須賀湊を利用して栄えていた西田町、東田町、東新町などの廻船問屋では湊機能の衰退は非常に大きな問題であったと思われる。

次に屋敷割について見ていく。町屋地域全体の屋敷割に関する資料は残っていないので、詳しい資料が残っている東新町の屋敷割についてのみ考察していく。図 8 は幕末絵図の東新町周辺を表したものである。この図を見ると西新町・西田町～西本町・軍全町では「江戸型」の屋敷割であったことがわかる。中央の空いたスペースは牢屋などに利用されていた。また、町割りは「縦町型」となっている。屋敷割、町割りの両方とも古い型であり、城下町プランの変容は見られない。その原因は地形的な制約を受けプランの進展が不可能で



図 8 町屋地域の屋敷割
横須賀城古図より引用

あったか、小規模な城下町でありプランの進展が必要でなかったのか、などさまざまなことが考えられるが史料が不十分であるため本研究では考察することができない。

表 8 は宝暦 9 年(1759)の『静岡県史資料編』に掲載されている「東新町検地帳」をまとめたものである。ただ、東新町の町割が詳しくわからないため残念ながら図で示すことはできない。この表を見ると東新町の表間口には統一性がない。最大の間口は西北 4 の 8 間 4 尺 6 寸で、最小は西北 10 の 1 間 4 尺である。また、間口が 2 間台～3 間台の屋敷が多いようである。特徴的なのは間口の売買が活発に行われていたということである。この資料に書かれているだけでも 7 つの屋敷で間口の売買が行われている。また、西北 1・2、8・9、14・15、東 6・7、南西 5・6、8・9、南東 5・6、8・9、12・13、14・15 などの多くはおそらく間口を 2 等分したものである。さらに 61 軒中 43 軒が半家であることから間口の売買が活発に行われ、間口規模が不統一になっていったのである。また、南西 7 では軍全町の者に売り渡しており、東新町の中だけでなく隣町とも間口の売買は行われていたようである。

最後に三社祭礼についてみていこうと思う。三社祭礼の起源は古く、少なくとも 1040 年以前から行われていたようである。三社祭礼は地固めの舞、田遊のような神事の部分と、祢里(山車)の巡行や踊り、狂言という付祭の部分に分かれる。神事の部分は古くから三熊野神社周辺の村で行われており、付祭は 14 代城主西尾忠尚の家臣が江戸天下祭りの文化を横須賀に伝えたものだといわれている。また、付祭は横須賀惣町の祭りであり、娯楽のための祭りであった(『三熊野神社の地固め舞と田遊び』)。このようにはじめは村の祭りであったが付祭が行われるようになり、村と町がそれぞれの役割を担って 1 つの祭りとなっている。祭りが城下町に取り込まれた背景には、城主が領民統治の材料として祭りを利用していたと思われる。

また、三社祭礼の中で町人の参加している付祭は町政に左右されるものであった。『庄屋覚帳』の記録では、確認できるだけでも天保

表8 宝暦9年の東新町の表間口規模

西北	間口	備考	東	間口	備考	南西	間口	備考	南東	間口	備考
1	2.55	半家	1・2	4.51	1軒家(注1)	1	4	半家	1	2.48	半家
2	2.55	半家	3	3.14	半家	2	3.45	半家	2	5.18	1軒家
3	2.59	半家	4	4.35	1軒家	3	3.56	半家	3	3	半家
4	8.46	1軒半家	5	3.3	半家	4	2.5	半家	4	5.41	1軒家
5	3.07	半家	6	2.525	半家	5	2.425	半家	5	3	半家
6	2.3	半家	7	2.525	半家	6	2.425	半家	6	3	半家
7	3.06	半家	8	3.3	半家	7	3.3(注2)	半家	7	6.17	1軒2分5厘役
8	2.53	半家	9	3.12	半家	7	6.55	1軒家	8	4	7分5厘役
9	2.53	半家	10	2.3	半家	8	2.3	半家	9	4	1軒家
10	1.4	3歩3厘役	11	3	半家	9	2.3	半家	10	2.48	半家
11	3	半家	12	5.3	1軒家	10	5	1軒家	11	2.43	半家
12	5.5	1軒家				11	5.27	1軒家	12	3.55	半家
13	7.55	1軒家				12	2.55	3分3厘役	13	3.55	半家
14	3.1	半家							14	2.075	3分3厘役
15	3.1	半家							15	2.075	3分3厘役
16	3.17	半家							16	3.3	半家
16	3.1	半家							17	3.1	半家
17	5	1軒半家							18	3.2	半家
18	5	1軒家							19	3.2	半家(注3)
									19	3.3	半家

『静岡県史資料編10近世二』所収の「東新町検地帳」より作成

間口単位は間、尺寸分

(注1)1と2は組み合わせの屋敷

(注2)7は1つの屋敷が分割されたため番号が2つある

(注3)19は1つの屋敷が分割されたため番号が2つある

7、8年(1836,7)、万延2年(1861)は「穀高にて町方一統至困窮に相成候処一(中略)一三社祭礼付祭延年に仕度一後略。」というように米穀が高値になり町方が困窮であるため庄屋が中止を請願したのである。そのほか地震や洪水の際も延期や中止になっていた。また、祭礼前には庄屋達が会合を開き、付祭について協議していた。このように三社祭礼においても庄屋が取り決めていたのである。

付祭では隣の町との関係も重要である。屋形の持ち運びでは、隣町が見舞に来て屋形を持ち運ぶことや、狂言では朝出立の際に役場まで送り届けることが決められており、隣町との付き合いが多かった。ここから城主が領民統治の一環として三社祭礼を用いていたことが伺える。

付祭は経費がかかりすぎるため文化5年(1808)では子供のみの参加にするなどの経費削減措置がとられていた。また、天保12年(1841)からは城主から付祭を質素にするように命令されており、衣装や道具などに金銭を費やさないように制限されている。そのほか嘉永7年(1854)には坂下ノ谷に祢里の巡行が入ることを禁止したり、付祭では番付を奉行所に提出し許可を得て執り行っていたことなど、城主側の意向が大きく反映していたのである。

以上町屋地域について考察してきた結果、横須賀城下町では酒造、宿屋、魚小売が盛んであった。魚小売は横須賀湊が機能しなくなった後も活発に行われ、横須賀の主要な産業の1つであった。また、湊が機能しなくなった後は陸上輸送により東・中本町に運ばれ、舟運は使われておらず田町周辺の廻船問屋は打撃を受けたと思われる。三社祭礼は穀高や災害で中止になったことや、付祭を質素にし、経費削減するなど庄屋や城主の町屋地域に対する意図に大きく左右されており、町政がよく反映していた。

VII. おわりに

本稿では、横須賀城下町の変遷過程と武家屋敷地域・町屋地域の地域制・機能から地域構造を解明することを目的として研究を進めてきた。以下に横須賀城下町の地域構造について判明したことをまとめる。

城下町建設は2代城主の時から始められ、元三社市場の町場であった本町付近を核に町割を行っていった。第一次建設期では本町、第2次建設期に新町、田町、軍全町が完成した。第3次建設期では町人町の新屋町、十六軒町、河原町、侍町の一番町～三番町が建てられた。第4次建設期では侍町の愛宕下、樹木ヶ谷、枕町と石津などの足軽町が建てられた。城下町の建設は、町屋地域は50年程度で完成し、武家屋敷地域を含めても100年以内に完成している。

武家屋敷地域の身分制的配置では城郭に隣接する石津、坂下ノ谷に最上級家臣の屋敷を配置し、一番町、二番町に上級家臣、下級家臣、樹木ヶ谷、枕町に下級家臣に屋敷を配置した。このように横須賀城下町の武家屋敷地域では明確な身分制的配置が行われていた。しかし、幕末期になると身分制的配置が緩和した結果、屋敷の細分化、家臣の混住化が進み地域制が失われて、城主の意図が反映されなくなっていった。また、細かく見ていくと一番町～三番町では上級家臣の住む地域で屋敷の細分化が起こり、中級～下級家臣の住む地域では屋敷の細分化が起こっていないことから、中級～下級家臣が上級家臣の住む地域に進出していったのである。

一方、町屋地域では町政に城主の意図が反映し続けていた。三社祭礼は領民統治の手段として城下町に取り込み、町同士の均衡のとれた関係を維持することをねらっていた。御用金、御用人足、三社祭礼などの取り決めを行っていたのは庄屋であり、城主とともに町政に大きな影響を及ぼしていた。また、石津町は町屋地域を構成する惣町とは区別されており、町政で重要な役割を担っていた庄屋がいなかったため、町政の運営にあまり影響を及ぼさなかった。

城下町建設当初から経済を支えていた湊の機能の衰退は町屋地域

の構造に大きな変化をもたらした。湊機能の衰退により海上輸送は減少し、陸上輸送が大きなウエイトを占めるようになる。それに伴って町屋地域の中心地も田町、新町など水路沿いの町から、魚類の集積地であり、多くの物資が集まる本町周辺に移っていった。

横須賀城下町の構造を明らかにするには、町屋地域をさらに細かいスケールで分析し、町人町の相互関係や地域的差異、主要産業の酒造、漁業についてもっと詳しく調べる必要がある。このように町屋地域においては研究の余地は十分残っており、これらを解明することが今後の課題である。さらに、周辺村落との関わり合いから横須賀城下町周辺の構造について解明することも重要である。

参考文献

- 大須賀町教育委員会(1974):『遠江国横須賀城址調査報告書』、静岡県小笠郡大須賀町
- 大須賀町教育委員会(1990):『横須賀城学術調査研究報告書』、大須賀町
- 大須賀町教育委員会(1991):『三熊野神社の地固め舞と田遊び』、大須賀町教育委員会
- 大須賀町郷土研究会(1983):『町内屋号調査集』
- 関戸明子・木部一幸(1998):館林城下町の歴史的変遷と地域構成、歴史地理学、40・4
- 関戸明子・奥土居尚(1996):高崎城下町の形成過程と地域構成、歴史地理学、38・4
- 町誌編纂委員会(1980):『大須賀町誌』、大須賀町
- 中西和子(2000):藤堂高虎の城下町建設にみる織豊期城下町プランの受容と展開、歴史地理学、42・5
- 中西和子(2003):織豊期城下町にみる町割プランの変容ータテ町型からヨコ町型への変化についてー、歴史地理学、45・2
- 矢守一彦(1970):『都市プランの研究 変容系列と空間構成』、大明堂
- 矢守一彦(1972):『城下町』、学生社
- 渡辺康代(2002):宇都宮明神の「付祭り」にみる宇都宮町人町の変容、歴史地理学、44・2